

3 2 【のびあがり】

そのおばけは、友だちから借りた漫画でみたことがありました。

その漫画では、目の前の土囊（どのう）がみるみる大きくなって、主人公を威嚇（いかく）してくる。

それで【のびあがり】と呼ぶのだそうです。

のびあがるその拡大率の凄さが、漫画でもよくわかり、ぼくは口を開け、眼をこらしたまま、漫画をみつづけかけていたものでした。

川獺（かわうそ）がばけたものかもしれない、とも書いてありました。

のびあがるときの擬音は、漫画ではこんなふうでした。

のののののび～る

のののののび～ん

のののののび～た

「【のびあがり】たあ、どんなおばけじゃ」

懐爺にぼくはききました。

漫画の説明だけでは、満足できなかったからです。

「【のびあがり】はみた者がかなりいます。人間の心に忍び寄るおばけとでもいいでしょうか。どんどん大きくなる影に怯えて【のびあがり】だと騒ぐ者もいますが、【のびあがり】はそんな規模ではなく、それこそ小山が大山になってしまうほど大きくなるおばけです」

「ほんものを、みてみたいのう」

ぼくは本気でいいました。

「金ちゃんなら、すぐにみられますよ」

懐爺は本気顔でいいました。

「みられるもんかのう」

「みられますよ」

そんな往復が何度かつづいて、暮れかかってきました。

懐爺は、こう優しく諭（さと）します。

「もう帰らないと、【のびあがり】が登場しますよ。【のびあがり】はくいませんが潰されることがあります」

「ならば、かえらん」

ぼくは強がっていいました。

「つぶされたくらいで、わしがしぬかい」

さらに強がりました。

「それではわたしは引っ込みます。わたしは【のびあがり】がこわいんです」

懐爺は汚い手で、汚い額の汗を拭くふりをしました。

懐爺に、こわいものなんかいるわけがない。

たぶん眠かったのだろう、とおもいました。

「おやすみなさい金ちゃん、ごきげんよう」

懐爺は奥にもぐりました。

というより、消えました。

そのときくだんの、いかにもおばけが登場するまえぶれとしての、うすきみわるい、なまぬるい風が吹いてきたのです。

祠の向こうの竹藪の向こうの、太陽が沈み始め、橙色に輝き始めました。

ぼくは祠に、いや懐爺に後光が射しているんだ、とかんじました。

うすきみわるくなまぬるい風が次第に強くなってきたけれども、ぼくは素直に帰る気になれない。

ぼくはまちがいなく、おばけの出現を待っていたのです。

竹藪がしきりに、鋭角的な音を立てています。

名も知らぬ獣が、啼いている感じの音です。

見上げると、竹藪が以前より大きくなっています。

目の錯覚ではない。

なぜなら竹藪は益々拡大してゆき、それこそ懐爺のいうとおり、みるみる小山が大山になってしまうほど、肥大化していったのです。

懐爺がお祈りかお呪いかなんかして、ぼくがみたがるおばけを呼び寄せてくれたのだと、ぼくは確信しました。

「ああ、これが【のびあがり】か。みごとなもんじゃのう。おそろしいもんじゃのう。つぶされそうじゃのう」

五分間仰ぎみると、ぼくは満足して、ふるえる足で帰宅しました。